

創作狂言

「里見八犬伝 最終章」ガイド

狂言について

狂言は、能と併せて「能楽」と称される伝統芸能です。猿楽の流れを受けて成立し、それぞれの名称は室町時代に使われ始めました。狂言は社会の中にある「笑い」を表現しています。

狂言は主役の「シテ」と相手役の「アド」による巧みな掛け合いが魅力ですが、主従や親子、詐欺師と田舎者など、時代や場所をこえて成り立つ人間関係を表現します。フィクションでありながら現実的な要素も持つのです。狂言では、とるに足らないことに「つい」夢中になってしまう人間の本質を「笑い」として表現します。臆病で、見栄や虚勢を張る、そんな愚かにも愛しくも思える人間の姿を表現するのが、狂言の「笑い」です。

そして、狂言はせりふ劇・写実劇と言われ、リアルな表現が特徴です。一方で、狂言の格調高さを支えるのが、「謡・舞・語り」です。これらの技術が表現に安定感を与えます。台本上の滑稽な笑劇は演技要素によって、真実味と深い人間性を持つ「狂言」という芸術になるのです。

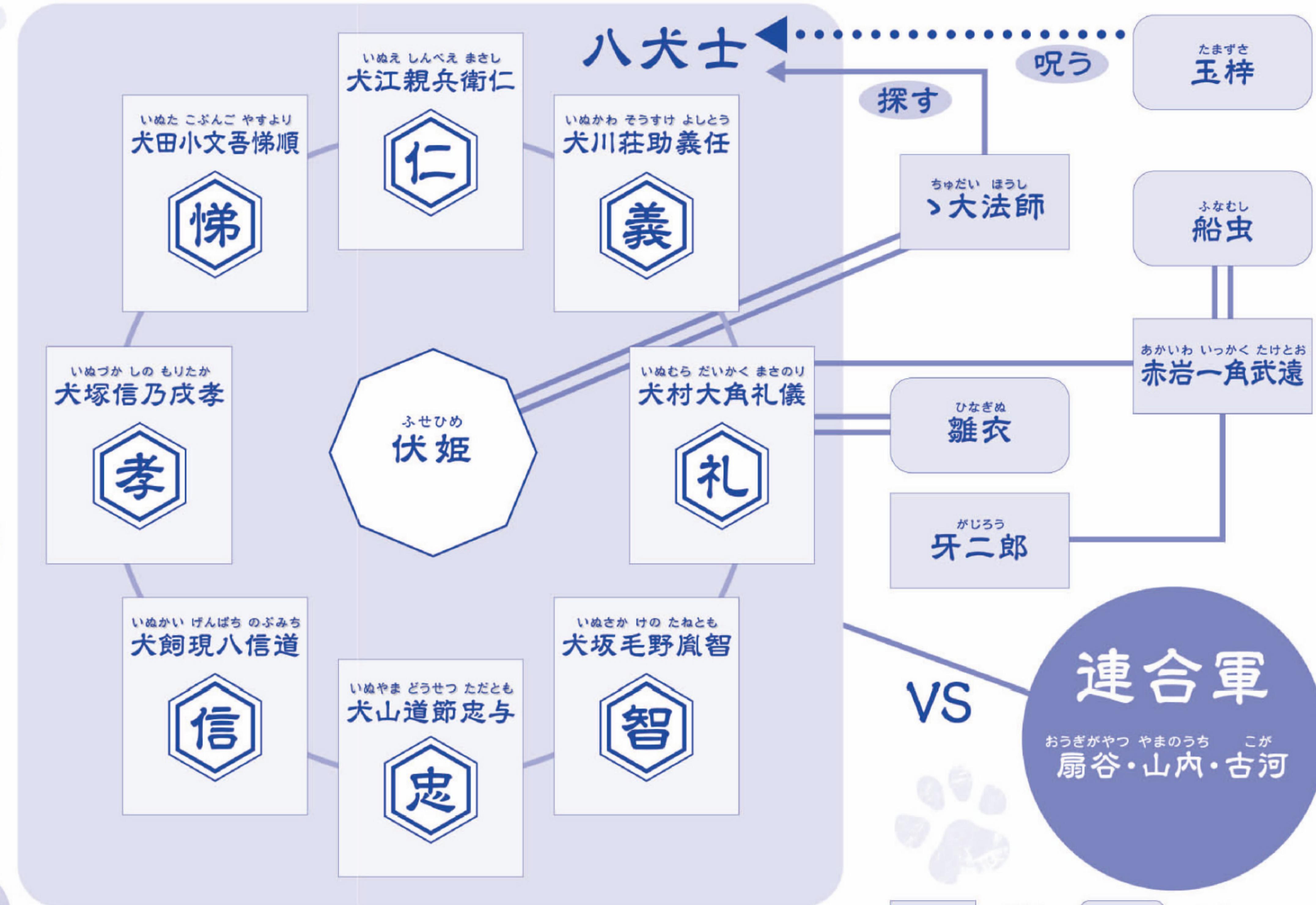
これまでの公演のあらすじ

【零】
結城合戦を落ち延びた里見義実は、逃走先の安房の国で山下定包とその妻・玉梓を倒しました。しかし十数年後、玉梓の怨念により娘の伏姫は亡くなってしまいます。伏姫の死に際、身に着けていた数珠から仁義八行の8つの玉が飛散しました。

【壱】
30年以上の時が流れ、犬塚信乃は父から託された公方家の宝刀を献上するため、義兄弟の犬川莊助に見送られ出発します。しかし、宝刀が偽物となり替えられていたため追われる身となり、追ってきた犬飼現八と芳流閣の上で組み合う内に共に川に転落してしまいます。

【弐】
流れ着いた2人を助けたのは、犬田小文吾でした。そこへ小文吾の妹とその夫、子の大八がやってきて信乃を渡すよう要求し、小文吾に斬られてしまいます。その後、息を吹き返した大八が八犬士であることが判明し、名を犬江親兵衛仁と改めますが、神隠しにあってしまいます。

【参】
信乃・小文吾・現八は主人殺しの罪で捕まっていた莊助を救出しますが、追わされて離散してしまいました。武藏国に逃れた小文吾は、犬坂毛野と出会います。一方、諸国を巡っていた現八は上野国庚申山に向かいました。



原作と本公演の見どころ

本公演の原作は『南総里見八犬伝』という小説です。作者は江戸時代の人気作家、曲亭馬琴(本名滝沢興邦)。彼が48歳だった文化11年(1814)に、作品の刊行が始まります。当初は2~3年で完結予定でしたが、刊行するとたちまち評判となり、結局完結までに28年の年月を要する大作になりました。現在でも人気が高いこの作品は、現代語訳の出版はもちろん、漫画化やドラマ化などのメディアミックスも盛んに行われています。

『南総里見八犬伝』では、「勸善懲悪」が重要なテーマの1つです。原作での八犬士は「善」の側に立つヒーローのような存在になっていますが、この創作狂言では、自分の正義のためなら殺人も厭わない八犬士の残酷な側面をあえて強調して描いています。「『勸善懲悪』って何だ。」というキャッチフレーズの通り、本公演が「善とは何か」「悪とは何か」について考えるきっかけとなれば幸いです。

■参考文献

- ・天野文雄(著)『現代能楽講義:能と狂言の魅力と歴史についての十講』大阪大学出版会(2004)
- ・小林貴(監)油谷光雄(編)『狂言ハンドブック』三省堂(2008)
- ・服部仁(監・著)『八犬伝錦絵大全——国芳三代豊国芳年描く江戸のヒーロー』芸艸堂(2017)
- ・犬藤九郎佐宏(著)『図解 里見八犬伝』新紀元社(2008)
- ・原田香織(著)『能狂言の文化史:室町の夢』世界思想社(2009)